

550

20



始





勝峯晉風校

茶發句集

東京古今書院發行

大正
15. 2. 4
内交

慙、あたらしく一茶の句集をつくつて、あとで後悔する
よりはといふ懸念からばかりでなく、一茶の門人たちが
うち寄つて、こしらへて置いたものを、そのまゝ覆刻した
方が、却つて一茶の氣持ちに近いか知れないと思つて、私
はかつて『新選一茶全集』に、此發句集を採用したのであつ
た。その舊版の紙型がなくなつたので、今度改訂版を出

すにあたつて、その中から一茶の生前刊行されたものに『おらが春』を加へて、『一茶七部集』を分冊し、一茶の諸遺稿を新に一茶の自筆本と對校する便宜を得たので、『一茶新集』としてこれも分冊すると共に、こゝに『一茶發句集』の文政、嘉永兩板を合して、携帶に便利なポケット型に再び覆刻する事としたのである。

大正十四年十二月

勝 峰 晋 風

一茶發句集

俳諧寺社中校正

一茶發句集

佛都 仁龍堂梓

序

一字不説は釋迦の饒舌、一貫の道は孔子の出來もの。其餘はあげて數ふるにいとまあらず。こゝにかけまくも高く仰ぎけるは、翁に古池在て後古池の句なく、一茶に松陰の句あつて後まつかげの句なし。誰かもし此兩句の玄味に指を染むとならば、一口に西江水を吞盡して始めて曉すべし。是を序となすのみ。

ふでとりてよと請れしは、文政十にふたつあまれる秋
玉くしげ二見の邊りに住ける 碓房題

印 印

俳諧寺

一茶肖像

春甫蒙信漏



あつち

まゝ

一茶

ひいき

う

まゝ

一茶發句集 上

春之部

元日や上々吉の淺黄空
元日も立のまんまの屑家哉

還曆

春立や愚の上にまた愚にかへる

新家賀

年立や雨おちの石凹むまで
蓬萊や唯三文の御代の松

富士畫に

初春や千代のためしに立給ふ

長谷の山中に年籠りして

我もけさ御僧の部なり梅の花

三崎の井は遊女柏木がかたみなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり
福わらや十ばかりなる供奴

かま獅子が
一巢兆の句也
誤つて混入せ
るなるべし

かま獅子が腮ではらひぬ門の松
逃しなや水祝るゝ五十聳
初夢に猫も不二見る寝様かな
袴着て芝にころりと子の日哉
小松引く人として人のをがむなり
垢爪や薺ナヅナの前もはづかしさ

天神参

ちさい子の麻上下や梅の花
梅の木や欲にや願はぬ三日の月

梅折や盗みますぞと大聲に

相馬覽古

梅が香や平親王の御月夜
梅咲や唐土の鳥の來ぬ先に
月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ
笠着るや梅の咲日を吉日と

山鶯よりもめづらしく新金を齒にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花
下戸村やしんかんとして梅の花

梅の花爰を盗めとさす月か
そら錠と人には告よ梅の花

島原

入口のあいそになびく柳哉
犬の子の踏えて眠る柳かな
けろりくはんとして烏と柳哉

御殿山

鶯も親子づとめや梅の花
うぐひすにあてがつておく垣根哉

松室——江戸
の俳人

鍬の柄に鶯鳴や小梅村
黄鳥のまてにまはるや組屋敷

松室にあそぶ

うぐひすの馳走にはかぬ垣根哉
黄鳥や泥足ぬぐふ梅の花
鶯ののにして鳴や留守御殿
うぐひすやよくあきらめた籠の聲

老婆洗衣畫

彼の桃が流れ来るかよ春霞

輕井澤

笠でするさらばくやうす霞

菜翁——江戸
の俳人巢光の
別號

菜翁とあそぶ

此門の霞むたそくや隅田スダの鶴

栗之——西原
氏、信濃淺野
の人

栗之六十賀

古松や又あらためていく霞

けふもく霞んで暮す小家哉

誰それとしれて霞むや門の原

西山やおのれが乗るはどの霞

小兒のあどけなさを

鳴猫に赤ン目をして手まり哉

素鏡——住田
氏、信濃長沼
の人

素鏡が母八十八歳賀

門畑や米の字なりの雪ユキ解ゲ水

雪どけや鷺が三疋立白に

世にあればむりにとかすや門の雪

庭の雪下手な消様したりけり

門前や杖でつくりし雪解川

三日月はそるぞ寒サムサはさへかへる

藪入や墓の松風うしろふく
芽出しから人さす艸はなかりけり

店ミセ開ビラキ賀

福の来る門や野山の朝笑ひ
かくれ家や猫にもいはふ二日フツカ灸ギョウ

初 午

花の世を無官の狐鳴にけり
齒も持たぬ口にくはへてつぎ穂哉

一年を賣て親を養ふは孝行云ん方なし

出代や汁の實なども蒔て置
出がはりやいづくも同じ梅の花

二月十五日雪ふりけるに

花のところへ雪のふる涅槃ネパ哉
寢て起て大欠アケビして猫の戀
蒲公英タンポポの天窓はりつゝ猫の戀
うかれ猫希妙キミョウに焦てもどりけり
行がけの駄ちんに鳴や小田の雁

板 橋

かしましや江戸見た雁の歸り様

閏二月二十九日といふ日、雨も漸おこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足ついで例の角田堤にかゝる。東はほのくしらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに上のならせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤くとうかめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はことごとく板をわたして、おのく御遊を待と見へたり。誠に無心の草木にいたる迄、春風に伏しつゝめでたき御代をあふぐとぞ覺へ侍る

五百^{イホ}崎^{ザキ}や御舟をがんで歸る雁

善光寺

開帳に逢ふや雀も親子連
雀の子そこのけく御馬が通る
竹にいざ梅にいざとや親雀
雀子やお竹如來の流しもと
慈悲すれば糞^{フン}をする也雀の子
雉子鳴やきのふ焼^{ヤカ}れし千代の松
夕雉子の走り留りや鳩^{ニホ}の海

黒門や下々にくと雉子の聲

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな
向くに蛙のいとこはとこかな
めてたさの煙聳へてなく蛙
我を見て苦い貌する蛙かな
象がたや櫻をたべて鳴かはづ
玉川や先御先へととぶかはづ
ゆうぜんとしく山を見る蛙哉

南都

朝起の古風を捨てぬ乙鳥哉
晝飯をたべにありたる雲雀哉
横乗の馬のつゞくや夕雲雀
棹鹿よ手拭かさん角の跡

右八十五章 魚休淵校

魚淵佐藤
氏信濃長沼
の人
二休同津
野正覺寺住職

それ蛇に世話をやかすな明り窓

神風や蛇が教へる山の道

春 納

おんひら／＼蝶も金ぴら参り哉
てふ飛や此世の望みないやうに
葎からあんな胡蝶が生れけり
田に畑にてん／＼舞の小てふ哉
門のてふ子が這へばとびはへば飛
さをしかや蝶をふるつて又眠る

てふといふ娘山路の案内しけるに、俄雨はらく

ふりければ

木の陰やてふとやどるも他生の縁

橋本町上人

陽炎や歩^{アル}行^キながらの御法談
かげろふや臼の中からま一筋
陽炎や蕎麥屋が前の箸の山
八^タ巾^コ上^ゲてゆるりとしたる小村哉
美^タしき八^タ巾^コ上りけり乞食小屋
我蒔た種をやれ／＼けさの露

春甫——村松
氏、信濃長沼
の人

かまくらや昔どなたの千代椿
菜の花や霞の裾に少しづゝ
かるた程門の菜の花咲にけり
大菜小菜喰ふ側から花咲ぬ
春の日や暮ても見ゆる東山
傘さして箱根越すなり春の雨

春甫新宅賀

安堵して鼠も寝るよ春の雨

婚禮

鳩いけんしていはく

梟フクロウよつらくせ直せ春の雨

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月
ついそこの二文渡しや春の月

春風や牛にひかれて善光寺
春の風おまんが布の形^ナりに吹^フ
狗^{イヌコロ}が鼠とるなり春の風
待^チくし日永となれど田舎哉
手のひらにかざつて見るや市の雛
あらが世やそこの草も餅になる
我宿は何にもないぞ巢立鳥
好^{スキ}くや此としよりを呼子鳥

観音奉納

只たのめ花もはらくあの通り
花のかげあかの他人はなかりけり

如病得醫

花を折^ル拍子にとれししやくり哉
花の陰なむさん火打なかりけり
斯う活て居るもふしぎぞ花の陰

保科——信濃
上高井郡

三月十七日保科^{ホシナ}詣

花ちるやとある木陰も小開帳
人^{エラミ}撰^ミして一人なり花の陰

刈萱堂——善
光寺近傍

おとろへや花を折るにも口曲る
花の木に鶏ニハトリ寐るや淺艸寺
堪忍をいたしに行や花の陰
山の月花盜人を照らし給ふ

刈萱堂

花の世は地藏ぼさつも親子哉
花の木のもつて生れた果報哉
大和めぐりする人に旅の眞言といふをさづけて
かならずよ迹見よそはか花の雲

今の世や猫も杓子も花見笠
有様アヤシは我も花より團子ダンジかな
苦の娑婆や花が開けばひらく連

山下常樂院に、人々こぞりて尊とむ佛おはしけるが、ことし千百年の供養なりとて讀經いと殊勝也。かくふつゝかなるおのれさへすぐせの結ムスビ縁エうすからざるにや、かゝる時に生れ逢ふことのうれしく、しばらく隨喜の泪を拭ひぬ。そのかみ其角 六あみだかけて鳴らん時鳥 とありしも、けふのやうなる折にやあらん。是さへ今

は百とせのかたみと成りぬ。かくいふけふもい
つか又昔とならん。されど我後の世をたのみお
く軒ばの梅さへ持ぬ境界、御佛、必見捨給ふな
よ。

一大事——後
生の一大事也

花桶に蝶も聞かよ一大事

新吉原

行灯ではやしただてるや花の雲

御所にて

棒突が腮でをしへる櫻かな

人聲にぼつとしたやら夕櫻
櫻へと見えてじんぐ端折哉
氣に入た櫻のかげもなかりけり
一本はさくらもちけり娑婆の役
此やうな末世を櫻だらけ哉

東西の花に散立られて、心も山にうつり行とい

ふ日は、三月廿日也けり

煤くさき笠も櫻の降日哉
君が代の大飯喰ふてさくら哉

五元集——其
角の句集

けふは町隣なる麻美と、前の日より約し置ける
に、かれさはりありてやみぬ。さはとて翌の命
待ものかはと、たゞ獨來たりしに、幸懷^ヒに五元集
といふものゝあれば、是究竟の句相手なり

小坊主や親の供して山櫻
櫻く^くと唄はれし老木哉
下く^くに生れて夜もさくら哉
一夜さに櫻はさゝらほさら哉

鞆 戲

ふらんどや櫻の花を持ながら
素鏡著たれお
ろしニ此句ノ
前書「鞆和
名由左布利、
里言布良武
抒」とあり

櫻艸といふ題をとりて

我國は草もさくらを咲にけり
今少したしなくも哉 堇艸
百兩の石につり合ふつゝじ哉
春の日の入所なり 藤の花
根岸にて

山吹をさし出しさらな垣根哉
惣く^くにきげんとらるゝ蠶かな

さまづけに育られたる蠶哉
やよ風這へく春の行方へ

地獄

夕月や鍋の中にて鳴田にし

餓鬼

花ちるや吞たき水を遠霞

畜生

散花に佛とも法ともしらぬ哉

修羅

人門——本文
ノマ、

聲くゝに花の木蔭のばくち哉

人門

さく花の中にうごめく衆生哉

天上

かすむ日やさぞ天人の御退屈

春耕——久保
田氏、信濃高
井野の人。
稻長——梨本
氏、同堀ノ内
の人

右八十三章 春耕校
稻長

夏之部

文虎、信濃淺野
氏、人、稿の前
文虎は三つど
子の妻なるみど
かりなるみど
り子を残りける
身まかりける
に」とあり。

下谷一番の貌カホして更衣
おもしろい夜は昔なり更衣
としとへば片手出す子やころもがへ
けふの日や替てもやはり苔衣
立ながら綿ふみぬいて出たりけり

文虎が妻身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初裕

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初裕

春日野の鹿に嗅カニるゝ裕哉

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ裕哉
鶯のほゝと覗くや花御堂
かくれ家や死シテばすだれの青いうち
夕かげや駕の小脇の夏ゲ花バナ持
是ほどのぼたんと仕かたする子哉
てもさても福相のぼたん哉
通ひ路に階ハシ子ゴわたすやかきつばた

二十四年榮花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花
芥子さげて群集の中を通りけり
卯の花の垣に名代ナダイのわらぢ哉
菴の苔花さくすべもしらぬ也
我上へ今に咲らん苔の花
乾く迄繩張る庭や若葉吹

禪寺

隅々も掃除届くや木下闌

法談の手まねも見へて夏木立
せい出してそよげ若竹今のうち
若竹と呼るうちも少スゴシかな
あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに
鮓になる間と配る枕かな

老翁岩に腰かけて、一軸をさづくる圖に

我汝を待事久し郭公
これでこそ御時鳥松に月
ほとゝぎす俗な庵とさみするな

此雨はのつ引^{ビキ}ならじほとゝぎす
せはしさを我にうつすな子規

鎮西八郎爲朝、人礫うつ所に

時鳥蠅虫めらもよつく聞け
卯の花も馳走にさくか子規
先住のつけわたりなりかんこ鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとやかんこ鳥
前の世のおれがいとこか閑古鳥
雲を吐く口つきした^{ヒキガヘル}り墓
罷り出たるは此藪の墓^{ヒキ}にて候
目出度さはことしの蚊にも喰れけり
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ
我宿は口で吹ても出る蚊かな
隙^{ヒマ}人や蚊が出たくと觸^フ步行
晝の蚊やだまりこくつて後ろから

蚊柱の穴から見ゆる都かな
とし寄と見てや鳴蚊も耳のそば
芝浦や初鰹から夜の明る
蜘蛛の子はみなちりぐの身すぎ哉
かはほりやさらば汝と兩國へ
鹿の親笹吹風にもどりけり
神國は天から藥降にけり

妙義

五月雨や夜もかくされぬ山の穴

粒々皆心苦

もたいなや晝寢して聞、田植唄
早乙女や箸にからまる艸の花
寐せつけし子の洗たくや夏の月
茨の花爰をまたげと咲にけり

右五十八章 呂英芳校

呂芳——信濃
長沼經善寺住
職。英——西嶋
士、同長沼の
人。

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり虫よ翌も又
ひいき鶉は又もから身で浮みけり
はなれ鶉が子の泣舟にもどりけり
初螢ついとそれたる手風哉

不忍池

螢火や呼らぬ龜は膳先へ
されわらぢ螢とならば隅田川
夕月や大肌ぬいでかたつぶり

小金原——下
總

小金原

柴の戸や錠のかはりにかたつぶり
かたつぶりそろく登れ富士の山
なかくに安堵貌なり羽拔鳥
虎が雨など輕んじてぬれにけり
六月や月夜見かけて煤はらひ
母馬が番して吞す清水哉
人來たらかへるになれよ冷し瓜
旅人や山に腰かけて心太

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏坐敷
旅瘦をめでたがる也夏坐敷
松影や扇でまねく千兩雨
手にとれば歩行たくなる扇哉
西山や扇おとしに行月夜

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ、三界無安と

いふ事を

蠅よけの艸も釣して扱どこへ

豊年の聲を上けり門の蠅
蠅一ツ打てはなむあみだ佛哉
世がよくばもひとつとまれ飯の蠅
侍に蠅を追せる御馬かな
やれうつな蠅が手をすり足をする
蚤の跡かぞへながらに添乳かな
のみ焼て日和占ふ山家かな
蚤の跡それも若きは美しき
蟬鳴や我家も石に成るやうに

蟬鳴や天にひつつく筑摩川
ねがはくば念佛を鳴け夏の蟬

新家賀

涼しさや糊のかわかぬ小行燈

春甫京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

兩國橋上

下見ても法圖ハツはないぞ涼船
草雫今拵へし涼風ぞ

藪村の貧乏馴て夕涼
魚どもや桶ともしらて夕すゞみ
涼しさや彌陀成佛の此かたは

銚子にて

朝涼や汁の實をつる脊戸の海

きのけふ鮮魚に宴して、けふは松宇佛

夜涼ミが笑ひ納めてありしよな
涼風やちから一ぱいきりぐす
すゞ風も隣の竹のあまり哉

松宇——松井
氏、信濃長沼
の人。

身の上の鐘ともしらて夕涼

上總國百首の郷は、東南に山連り、西北にうみ開けて、防人^{サキモノ}の備へに究竟の地なりとて、此度陣屋いとなむ繩張といふこと有。其畠の瘠のやうにさし出て妨なる小家あり。主と見へて翌をもしらぬ老婆ひとり、麻をうみて居たりけるを奉行人深く憐みて、汝子ありやといへば老婆いふ、をのこひとりもちたりけるが、いつくのとし古郷をよ所にふり捨て、今は江戸の本所とやらんに人の髪ゆふわさをなすよし、風のたよりに聞侍るとばかり泪

はらひくこたふ。さあらば其男呼返すべし。よろしき替地にかひくしき家をあたへん。しかのみならず、其男には永く髪結司^{ツカサ}のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ぶちといふを申下して、身をやすくすぐせん。あさ糸の細き稼^{ナリハ}ひをやめて、遅々たる春の日にはちりかふ花に無常を觀じ、凄々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ、明暮心任^{マカ}せに井^{ボヤツ}の種を蒔なば、なんほうたのしからん。汝が此家このかまへのさはりになるこそ、天より汝に幸ひ下し給ふなれ。とくく爰をしりぞき、あ

しこにうつれよといふに、老婆むくくとはらだ
たしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首
打ふりくゝいふやう、よくもあざむき給ふものか
な。是はわらはが先祖よりいく世ともなく住ふる
して、大事のくスミカ栖なれば、たとへ黄金星にとゞく
程給るとも、我目には一椀の麦飯にしかずとこそ
思ひ候へ。たゞく此はにふの小屋こそ、さうなき
寶なれ。よしや命斷タタルるとも外へは行かじと、手す
り足すり貝を作りて、なかぬばかりに申せば、奉行
人の慈悲も今は施すべきよすがなく、老婆のちに

なくひそと、ふたゝび繩はりして、つひに其家をよ
きて地どりなりぬ。あはれ月日の照らすかぎり、
露霜のおつる所に生として活るもの、たれか國命
そむき奉らん。しぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられ給ふ夕涼み

碓氷にて

しなの路の山が荷になる暑哉
落の葉にぽんと穴あく暑哉
迹からも又ござるぞよ小夕立

素鏡——既出
文路——上原
氏、善光寺の
人

湖水から出現したり雲の峯
蟻の道雲の峯よりつゞきけん
投出した足の先なり雲の峯
川狩や地藏の膝の小脇差
川狩のうしろ明りやむら木立

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ
麻の葉に借錢書て流しけり

右五十五章
素鏡校
文路

一茶發句集 下

秋之部

秋立や隅の小隅の小松島

狗子有佛生

秋來ぬとしらぬ^{エノコ}狗が佛かな
星さまのさゝやき給ふけしき哉

聲星にいで披露せん稻の花
姫星の御顔をかくす榎かな
子寶が蚯蚓のたるぞ梶の葉に

病中

うつくしや障子の穴の天の川
木曾山へ流れ込けり天の川

わらぢながら墓参りして

息才で御目にかゝるぞ艸の露
来の子や御墓参りの箒持

亡妻一茶
の妻菊女、
政六年九月
歿

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたゝく
玉棚や上坐しく鳴きりくす

魂送

おれが場もとくたのむぞよ佛達
精靈の立ふる舞の月夜哉
山里やあゝのかうのと日延盆
べつたりと人のなる木や宮角力
艸花を腮でなぶるや勝角力

高井野——信
濃上高井郡

板行^{イタカ}にして賣れけり負角力
椽はなや二文花火も夜の體
稻妻やうつかりひよんとした貌^{カホ}へ

神 前

秋風や艸も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

病 後

かな釘のやうな手足を秋の風

さと女——一
茶の長女、文
政二年六月歿

さと女三十五日

秋風やむしり残りの赤い花
秋風の吹けとは植ぬ小松哉
墨染の蝶がとぶなり秋の風

正見寺の上人十ばかりなる後住を残して、迂化
ありし哀さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ

五十過ては

露はらりく大事のうき世哉

露置や茶腹で越るうつもの山
しら露やいつもの處に火の見ゆる
露ちるや地獄の種をけふも蒔く
しら露に淨土參りのけいこ哉
火ともして生おもしろや艸の露

男女私^{ヒツカ}にちぎりて、夜ひそかに逃行を教訓して

人間は露と答へよ合點か

愛子を失ひて

露の世は露の世ながら去ながら

露ちるやむさい此世に用なしと
あり明や淺^{アサ}間の霧が膳を這ふ
寢がへりをするぞ脇よれきりくす
彌陀堂の土になる氣かきりくす
きりくす聲が若いぞくよ

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛かな
寒いぞよ軒の蜩^{ヒグラシ}唐がらし
其分^{ブン}にならぬくと蟪蛄哉

古犬や蚯蚓の唄にかんじ貌
御祭に赤い出立のとんぼ哉

二百十日

世の中はよすぎにけらし艸の露
御目出度存候けさの露

うとん花

甘い露ばせをさく迎降りしよな
朝貌や人の貌にはそつがある
朝貌の上からとるや經山寺

女郎花あつけらこんと立りけり
鬼灯^{ホウキ}を膝の小猫にとられけり

萩寺

存の外俗な茶屋あり萩の花
耳に數珠かけて折なり艸の花
入相の聞處なり草の花
きりくしやんとしてさく桔梗哉
むだ花に氣色とられし瓢かな
江戸川や月待宵の芒船

希杖湯本
氏信濃田中
の江坂口
楚江
氏同夜間瀬
の人

名月や先はあなたも御安全
明月の御覽の通りくづ家哉

病中

名月やとばかり立居むづかしき
明月のさつさと急ぎ給ふかな

右六十二章 希杖校 楚江

明月を取てくれろと泣子哉

姥捨山

けふといふけふ名月の御側哉

赤馬關

名月や蟹も平ダイラをなのり出

筑磨川舟留

名月やつい指先の名所山

やかましかりし老妻ことしなく

小言コゴトいふ相手もあらばけふの月

姨捨などは老足むづかしく

有合アヒの山ですますやけふの月

月 蝕

人貌は月より先へ缺にけり
むだ艸も穂にほがさいて三日の月
深川や蠣殻山の秋の月

春耕孫祝

門の月ことに男松のいさみ聲
翌の夜の月を請合ふ爺哉
明く口へ月がさすなり隅田川
秋の原知^シたらなんぞうたふべき

秋日和とも思はない凡夫哉
なぐさみのはつちくや秋日和

母のなき子の這ひならふに

をさな子や笑ふにつけて秋の暮

病 後

ゑいやつと活た所が秋のくれ
中く人に生れて秋の暮

八月二十九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ、八月二十八日詣

長崎の舊友一茶の長崎に
旅せるは寛政
時代なるべき
も、當時の遺
稿の存するも
のなき爲め、
交友その他詳
しくはこれに
知りがたし。

るとしてありけるに、今は三十年餘りの昔な
らん、おのれ彼地にとまりて、一ツ鍋のもの喰
ひて笑ひのゝしり、むつまじき人達なり。あはれ
きのふ参りたらんには面會して、こしかた語りて
心なぐさまんものを、互ひに四百餘里の道程へだ
たりぬれば、ふたゝび此世には逢ひがたき齡にし
あれば、しきりにしたはしくなつかしくなむ。

近づきの樂書見へて秋の暮

茶店の万灯日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒哉

六十にふたつ
一茶六十二、
文政七年

六十にふたつふみ込^ム夜寒哉
あばら骨なでじとすれど夜寒哉

若僧の扇面に

影法師^{カゲボシ}に恥よ夜寒のむだ步行

旅

一人と帳面につく夜寒かな
草藪も君が代を吹^フ小夜ぎぬた

豊秋

二軒家や二軒餅つく秋の雨

外が濱

けふからは日本の雁ぞらくに寝よ

旅にありて

雁鳴やあはれ今年も片月見
白川や曲り直して天津雁
田の雁や里の人数はけふも減る
ちつくと直に鳴けり小田の雁
天津雁おれが松にはありぬ也
朝夕や峯の小雀の門駟る

立嶋の今にはじめぬ夕かな
普陀らくや蛇も御法の窩に入
蛇も入穴はもつぞよ鈍太郎
足枕手枕鹿のむつまじや
しき島や深山の鹿も色好む
やさしさや鹿も戀路に迷ふ山
人ありと見せる艸履や田番小屋

米穀下直にて下々なんぎなるべしとは、こと國
の人うらやましからん。

正風院——門
人魚淵の別號

日本の外が濱まで落穂哉
旅人の垣根にはさむち穂哉
姨捨はあれに候とかゝしかな
人はいざ直^{スゲ}な案山子もなかりけり
穂芒や細き心のさわがしき

爰に正風院、此奥に百花あり。

門に立ッ菊や下戸なら通さじと
大菊や今度長崎よりなどゝ
勝た菊大名小路通りけり

水沔——水涕
の誤り

まけ菊をひとり見直す夕哉

後の月

月の貌としては十三そこらかな

名所紅葉

欠腕も同じ流れや立田川
棹鹿の水沔拭ふ紅葉かな
大寺の片戸さしけり夕紅葉

毒茸

人をとる茸はたして美しき

茸狩のから手でもどる騒かな

戸隠山

初梨の天から降^{フツ}た社だん哉
柿の木であいと答へる小僧哉

小布施——信
濃上高井郡

小布施

拾はれぬ栗の見事よ大ききさよ
虱を捻りつぶさんことのいたはしく、又門に捨て
て斷食さするも見るに忍ばざる折から、御佛の
鬼の母にあてがひ給ふものを、ふと思ひ出して、

我味の柘榴へ這す虱かな

老の身は今から寒さも苦になりて

山畠や蔡麥の白さもぞつとする
秋の夜や障子の穴の笛をふく
庵の夜や寝あまる罪は何貫目
末^{ワラ}枯^{カレ}や諸勸化入れぬ小制札

九月 盡

けふまではまめで鳴たよきりぐす

雲士——吉村
 氏、信濃長沼
 の人。——中村
 掬斗——
 氏、同長沼の
 人。

右六十四章 雲士校
 掬斗

冬之部

やあしばらく蟬だまれ初しぐれ
 ぼた餅の來べき空なり初時雨
 初時雨夕飯買に出たりけり
 目ざす敵は鶏頭よはつしぐれ

旅

しぐるゝや家にしあらば初しぐれ

桑名

蛤のつひのけぶりや夕しぐれ

途中にて素玩に逢ふ

しぐれ込め角^{カド}から二軒目の菴
 夜しぐれやから呼^{ヨビ}されしあんま坊
 人の爲しぐれておはす佛かな

悼

鳴鳥こんなしぐれのあらんとて

盗人おのが古郷に隠れて縛られしに

業の鳥罟を巡るやむら時雨
菜畠を通してくれる十夜哉
もろくの愚者も月夜の十夜哉
鳶ひよろゝひゝよろ神の御立げな

桃青靈社

御寶前にかけて奉る初しぐれ
はせを忌やことしもまめで旅虱

えひー互ひ
になし合ふこ
と、或は「ゆ
ひ」ともいふ。

義仲寺へ急ぎ候初しぐれ
はせを忌や晝から錠の明く庵
はせを忌に丸い天窗の披露哉
御取越飴で餅くふはなし哉

春日山

さをしかやえひしてなめる今朝の露
霞まで生^{イキ}やうものか霜の鐘

橋上乞食

母親を霜よけにして寝た子哉

追分

霜がれや鍋のすみかく小傾城
霜枯や新吉原も小藪並

一人旅

次の間の灯で膳につく寒哉
としかさをうらやまれたる寒哉

上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢のむ
すび所とす。きのふあたり住^{スミ}倦^{アキ}たる人のなせるわ
ざにや、垣の薜のそれなりに枯て、其實はほろほ
ろ落たり。いく人の泪をかけし果とも思れて、秋

にたち増りて土をならして、菜のやうなるもの蒔
置けるが、雪の片隅にはやくと青みぬ。是必^{メデ}愛^イ
度^{タキ}春を迎へて、餅いはふべき旦^{アシタ}の料ならんか。壁
には七福即生の守り張^{カサネ}重て、盗人の輩を防ぎ、竈
は大根注連といふこものを引はへて、回祿を逃ん
とす。荒神松はいまだ野の色ながら、横ざまにこ
けたり。皆たゞ行末いつ迄か佳果^{ハナテ}んあらましぞと
見ゆるも、今は雲にや迹をくらしけん。山にや影
をかくしけん。すべていづこかつひの栖ならん。
かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれん

ことをおもふのみ。

身に添^フや前の主の寒^{サムサ}迄

文化六年十二月十五日。賀舊家大川氏

木枯や千代に八千代の門榎
木がらしや雀も口につかはるゝ
水仙や大仕^シ合^{アハセ}のきりくす
水仙や垣に結こむ筑波山
嵯峨村と名乗り貌なり枇杷の花
あち葉しく日向に酔し小僧かな

落葉して三月ごろの垣根哉

花鋤委地無人收

思ひ艸思はぬ艸も枯にけり
枯芒昔婆々鬼あつたとさ
女郎花なんの因果で枯^{カレ}かねる
大根引大根で道を教へけり
雉子なども粗鳴にけり大根引
鳴雀其大根も今引ぞ
爐開やあつらへ通り夜の雨

朝晴にばちく炭のきげん哉
分てやる隣もあれなおり炭
炭の火に峯の松風通ひけり
炭の火に月落鳥鳴にけり
櫓の火にうしろむけけり最明寺
櫓の火や目出度御代の顔と顔

旅

斯う寐るも我火燵ではなかりけり

嵯峨山

はやくと誰冬ごもる細けぶり

歸 菴

留主札もそれなりにして冬籠

小人閑居成不善

冬籠惡ものの喰のつりけり
さし捨し柳の陰を冬籠
眠り様鷺に習^{ナラフ}ん冬ごもり
西の木と聞てたのむや冬籠
ばせを塚先拜むなりはつ紙子

加茂の水吉野紙子とほだへたり

大坂八軒家

舟が着て候とはぐふとん哉
祐成がふとん引はぐ笑ひ哉
今少雁を聞迎ふとんかな
漏とのがおそろしといふ衾哉
三日月と肩をならべて網代守
網代守爰にとゑへんく哉
網代守天窓で揖をとりけり

なひ——地震

さきのとしの大なひに鳥海山はくづれて海を埋め
甘満寺はゆりこみ沼とかはりぬ。さすがの名どこ
ろも事ごとらむがごとくなりけり。

象がたの欠を掴んで鳴千鳥
御地藏と日向ぼこして鳴千鳥
おちつきにちつと寐て見る小嶋哉
汝等も福は待かよ浮寐鳥
みそさゞいちといふても日が暮る
暉をかくして母の夜伽かな

門口に來て氷るなり三井の鐘
一さんにとんで火に入ルあられ哉
盛任モリダウがしやつ面ツラたゝくあられ哉
初雪や俵の上の小行燈
はつ雪や今行く里の見へて降ル
初雪やこきつかはるゝ立佛
初雪や鳥も構はぬ女郎花
石の上の住居のこゝろせはしさよ
雪ちるやきのふは見へぬ借家札

くる人が道つけるなり門の雪
ちとたらぬ僕や隣の雪もはく
むまさうな雪がふうはりくと
ほちやくと雪にくるまる在所哉
犬どもがよけてくれけり雪の道
雪ちるや脇から見たら榮耀駕

十二月廿四日古郷に入ル

是がまあ終ツイの栖か雪五尺

一茶病中のでいたらく

狂なりに吹込雪や枕もと
棧^{カケハシ}や凡人わざ^{ハシ}に雪舟^{フネ}を引く
翌は又どこの月夜の里神樂
行人を皿でまねくや藥喰
鰻汁やもやひ世帯の惣厨
出始を祝ふてたゞく瓢かな
一夜さは出来心なり寒念佛
寒念佛さては貴殿でありしよな
叱らるゝ人うらやましとしの暮

梟^{フクロウ}よのほゝん所か年の暮
ともかくもあなた任せのとしのくれ
節季候や七尺去て小せき候
名月や御煤の過し善光寺
念々相續

みだ佛のみやげに年を拾ふ哉
節分

福豆やふく梅干や齒にあはぬ
かくれ家や齒のない聲で福は内

餅花の木陰にてうちあはれ哉
神の灯や餅を定木に餅をきる
我門へ來さうにしたり配り餅
わんといへさあいへ犬もとし忘れ

長崎

君が代やから人も來て年籠

雜

牧人——梨本
氏、信濃堀ノ
内の人。

おのづから頭が下るなり神路山
掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦
月花や四十九年のむだ歩行
鶴の子の千代も一日なくなりぬ
佛ともならでうかゝ老の松

牧人七十賀

きゝ給へ竹の雀もちよゝと

琵琶湖

龜どのゝいくつのとしぞ富士の山

天下泰平

松陰に寝て喰ふ六十余州哉

文虎——既出
春甫——既出

右百六章 文虎校
春甫

朝菜つみ夕菜つみつゝつむとしの
つむりの雪ぞ野らにまがへる
世の中はかくてもへけれぬるてふの
夢見てばかり身をすぐす哉

かつしかの栖立退く日、さし木のめ吹たるに

古菴にのち住人よ花さかば
心さし木の櫻とをしれ
いさましの老木ざくらや翌が日に
倒るゝ迄も花は咲ぬる
うつ波に千度しづみてうき艸の
うき世並とて花や咲らん
夕立のまだ晴やらぬ木の間より
雫ながらに出る月かな

功成身退といふ事を

里くを涼しくなして夕立の
光りしりぞく山の外かな
七夕の人見給はゞむさしのゝ
艸葉のむしとおぼしめすらん

念彼觀音力

稻の穂よ南無稻の穂よく
かゝるみのりの秋はあらじな
行雲の迹からはげる青空へ

うそを月夜のむらしぐれかな
木曾おろし雲吹盡す青空の
はづれにけぶる淺間山かな
こちあなち風のまにく吹けばとぶ
蘆の身にさへせはしなの世や
いくばくのなげきこりつむ小車の
下り坂なる我齡かな

みちのくへたつとて

ながらへて歸らん事もしら川の
關を越行く老の身なれば
追風にうしろ任せてあみだ笠
あのづと西へ吹れ行くなり

月を覆ふ雲、花を散す風、善惡表裏はめぐれる車の輪の
如しと、いにしへの人のことばこそむべなれ。我師は能^{ヨシ}
これを曉^{サト}し、生涯を自然に任せられしに、いぬる文政丁
亥の冬、身まかられてのち教へを請し人／＼、遠き境ま
でも最寄／＼にいひ傳へ、はやくもかけあつまりて残れ
る人にもものとふに、いひおける一言もなく、そのうへ何
者のわざにや、日頃机のほとりにつみ重ねたる反故、も
のの本どもをさへ、空吹き拂ふ風の塵ばかりもなく失は
てゝ、いたづらに漉かへす紙のうちにやひさがれけん。

星見せ——露
店

哀れ尊き文もあらんに、見る人なくば、ねう比丘にこが
ねうちくれし諭サトシに同じ。手の物とられしこちして、お
のくむなしく家に歸り、訪れし時く書捨おかれし筆
の跡とり出し、或は行かふ市の星見せなどに見當る行脚
の時の日紀やうなるもの、價もてこれを求などしつゝ、
あしこ爰ひろひ集て、このふたつの巻となすは、ながき
かたみと見るべきまで也。

文政十あまり二とせといふ年の冬

俳諧寺の沙彌某しるす

文政十二年丑七月

信州 俳諧寺

門從藏板

俳諧
一茶發句集
上

嘉永戊申新鑄

俳諧 一茶發句集

東都書林 山城屋佐兵衛

増賀ひじりの師の御房、僧正の參内のをり、乾鯉の太刀はき瘦馬に乗
て供奉し、又皇太神宮の名利を捨よとおほけなき靈勅により、やがて
赤裸になりて、くるひそめきしは、僧綱をたまはり、錦繡を身にま
とひしよりも、中／＼に内心清淨ならんか。近きころ信濃の國柏原俳
諧寺一茶は、元祿のむかしの惟然坊のたぐひにて、上野の坂本町、本所
番場にいほりせしをりは、晝も行燈をともしおきて煙草火にかへ、或
は客來り餉の時いたれば、それとともに店屋に行、食事をはれば、かた
みに料足を拂て返りしなど、なべての事辛き世をいともやすげに、す

ごせるものから、四方遊歴の先／＼には奇談笑話、人口に繪炙せるもの多し。發句、文章もまたそれに隨ひ、頗る解き膽をうばゝしむる物少からず。實一世の俳將なりし。斯而文政丁亥の冬、黄泉の客となりしのち、門徒集りて反古物しらべしかど、斯く隱逸のさがにしあれば、いひのこす言葉もなく、さるさうしやうのものさへ、ちり／＼になんなりしを、からうじて句集いできにたれど、それさへ藏板とかいふものにて、世におほやけならざるををしみ、書肆何某おのれにはかりて刪補を乞ふ。辭する事にもあらねば、もとの集の上に自他の耳底に残り、すりまき、消息やうのたぐひに見えたるをも書くはへて、あまつ

さへ始につたなき筆をはしらす。

弘化丁巳彌生

俳沙彌一具

あがりたるよの言のはを見るに、すなほなる、巧なる、はいかいなる
さま／＼なれど、いづれも海山花鳥のあはれをつくして、そのもの、
まことをうしなへるは、ひとつもあることなし。たま／＼そのまこと
にたがへるありと見ゆるは、なか／＼にちもはずなるなさを、こめ
たるものにていとめでたし。くだれるよにいたりては、大かた人のこ
ころうすくなりゆき、まことのすぢをふかくもたどらねば、ちのづか
らあさはかになりて、いにしへには似べくもあらずなんなりになる。
今し、よに行るゝはいかいの發句といふもまた、かくのごとくなるべ

し。一茶翁はそのふるまひも發句もうまく、いにしへのはいかいのこ
ゝろを得し人なることはいふもさらなり。その集あまたなりしが、今
はよにちりぼひて、たはやすくうべくもあらずなれるを、書林向榮堂、
嗽芳菴墨芳とこゝにあなぐり、かしこにもとめて、かく一部の集とな
しぬるは、たれかはめでよろこばずしもあらん。

天保十四年みなつき

すみだ川のつながぬ舟にて

櫻園主人

一茶發句集 上

春の部

元日や上々さちの淺黄空
元日も立のまんまの屑家かな
春立と申もいかゞ上野山
土藏から筋違スヂガヒにさすはつ日かな
鶯のいな啼やうも今朝の春

あばら家の其身其まゝ明の春

還 曆

春立や愚のうへにまた愚にかへる

新家賀

年立や雨あちのいし凹むまで
あら玉の年立かへるしらみかな
初空へさし出す獅子の天窓かな

草 庵 二 句

菴の春寐とべる程は霞なり

我春も上々吉ぞうめの花

三崎の井は遊女柏木がかたみなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり
若水やそうつき込^ゝ梅の花
蓬萊や唯三文の御代の松
蓬萊に南無くと云^ッ子供かな

富士の畫に

初春や千代のためしに立給ふ
初春も月夜となりぬ人の皺

長谷の山中に年籠りして

我もけさ御僧の部なり梅の花
福わらや十ばかりなる供奴

小兒のあどけなきを

かま獅子が腮ではらへぬ門の松
袴着て芝にころりと子の日かな
折てさすそれも門まつにて候
小松引^ッ人として人のおがむなり
我庵やけさの年玉取に来る

初夢に猫も不二見る寐やう哉
逝しなや水祝るゝ五十聲
大聲や廿日過ての御萬歲
鳴猫に赤ン目をして手まりかな
鶴の畫に
人の曳小まつに千代やさみすらん
脇差の柄にふらく若菜かな
垢爪や薺の前もはづかしき

天神參

ちさい子の麻上下や梅のはな
梅の木や欲にや願はぬ三日の月
梅折や盗みますると大聲に
梅の木のあるかほもせぬ山家かな
餅組も一ざしきなりうめの花
鳥の音に咲うともせず藪の梅
梅に月いやみからみはなかりけり
菰はげばはやあかくと梅の花

團十郎

咲たりな江戸生ぬきのうめの花
梅折や天窓のまるい影法師

信濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花

相馬覽古

梅が香や平親王の御月夜
梅さくや唐土の鳥も來ぬ先に
月の梅酢のこんにやくのとけふも過ぬ
空さるやうめの咲日を吉日と

山鶯よりもめづらしく、新金を齒にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花
下戸村やしんかんとして梅の花
紅梅やうつとしければ二本まで
梅の花爰を盗めとさす月か
そら錠と人にはつげよ梅の花

島原

人口のあいそになびく柳かな
皮剝が腰かけ柳青みけり

螢飛^フ夕^{ユフ}をあてやさし柳
門柳天窓でわけて這入けり
人聲にもまれて青む柳かな
犬の子のふまえて眠る柳かな
けろりくわんとして鳥と柳かな

善光寺堂前

白猫のやうな柳も御花かな

御殿山

鶯も親子づとめや梅の花

三日月やふはりと梅に鶯が
鶯にあてがつておく垣根かな
楸の柄に鶯なくや小梅むら
鶯の目利してなく我家かな
是程の上鶯を田舎かな
鶯のまてにまはるや組屋鋪
袖下はみな鶯や小せき越

松室に遊ぶ

鶯の馳走にはかぬ垣根かな

鶯や泥あしぬぐふ梅の花
鶯ののにしてなくや留守御殿
鶯やよくあきらめた籠の聲

閏正月

正月のふたつありとや浮寐鳥

老婆洗衣畫

彼の桃もながれ來よく春霞

輕井澤

笠でするさらばくやうす霞

西山やあのれが乗るはどの霞
茶鳴子のやたらに鳴^{ナル}や春がすみ
牡丹餅を喰はへて霞む鳥かな
霞日や夕山かげの飴の笛
霞日やしんかんとして大座鋪
横乗りの馬のつくや夕霞
霞けりにくい宿屋も迹の村

菜翁と遊ぶ

此門の霞むたそくや墨田の鶴

還暦の賀

老松やまたあらためていく霞
誰それとしれて霞むや門の原
けふもく霞んで暮す小家かな

某母八十八歳賀

門畠や米の字なりの雪解水
雪解や門は雀の十五日
あさましやちよつとのがれに残る雪
鍋の尻ほしならべたる雪解かな

某母——文政
板に「素鏡母」
とあり。

雪解や鷺が三疋立白に
世にあればむりに解すや門の雪
菴の雪下手な消様したりけり
門前や杖でつくりし雪解川
三日月はそるぞ寒さは冴かへる
藪入や三組一所に成田道
藪入や墓のまつ風うしろ吹
芽出しから人さす草はなかりけり
はや淋し朝がほ蒔といふ畑

藪入のわざと暮^スや草の月

店開賀

福の來る門や野山の嘲笑ひ
かくれ家や猫にもいたふ二日灸

初 午

花の世を無官の狐鳴にけり
齒も持たぬ口にくはへてつぎ穂哉
夜に入^イば直したくなるつぎほかな
山燒の明りに下る夜舟の火

「いたふ」
「いはふ」の誤
也。

畑打や子が這步行^クつゝじ原
畑打や田鶴啼^キわたる邊り迄

一年を賣て親を養ふは、孝行云んかたなし

出代や汁の實なども蒔て置^ケ
出代やいづくもおなじ梅の花
出代の市にさらすや五十貌

二月十五日雪降けるに

花のところへ雪のふる涅槃哉
御ねはんやとりわけ花の十五日

小うるさい花が咲とて寐釋迦哉
寐ておはしても佛ぞよ花の降る
寢て起て大欠して猫の戀
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
おどされて引返すなりうかれ猫
うかれ猫奇妙に焦て戻りけり
戀猫のぬからぬかほで戻りけり
うかれ猫どのつらさげて又來たぞ
行がけの駄賃になくや小田の雁

彼岸とて袖に這する風かな

板 橋

かしましや江戸見た雁の歸り様
寐た跡の尻も結ばず歸る雁

閏二月二十九日といふ日、雨も漸おこたりぬれば
朝とく頭陀袋首にかけて、足つひで例の角田堤に
かゝる。東はほのくしらみたれど、小藪小家は
いまだくらかりき。しかるに上のならせ給ふにや、
川の面に天地丸赤くとうかめて、田中は新に道

を作り、みぞ堀はことくく板をわたして、おのく御遊を待と見えたり。誠に無心の草木にいたる迄、春風に伏しつゝ、めで度御代をあふくとぞ覚え侍る。

五百崎や御舟をがんで歸る雁

善光寺

開帳にあふや雀も親子連
雀子や川の中にて親を呼
雀の子そこのけく御馬が通る

竹にいざ梅にいざとや親すゝめ
我と來て遊^{アソベ}や親のない雀
雀子やお竹如來の流しもと
慈悲すれば糞をする也雀の子
雉子なくやきのふ焼れし千代の松
雉子なくや見かけた山のあるやうに
夕雉子のはしり留りや鴉の海
黒門や下たにくと雉子の聲
雀子のはやしりにけり隠れやう

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな
榎まで春めかせたり啼蛙
親分と見えて上座に鳴蛙
向く^くに蛙のいとこはとこかな
めでたさの煙聳へて啼蛙
我を見て苦いかほする蛙かな
象がたや櫻をたべて鳴蛙
玉川やまづ御先へと飛かはづ

いうぜんとして山を見る蛙かな
其聲でひとつ踊れよ啼蛙
産さうな腹をかゝえて啼蛙
我庵や蛙初手から老を啼

南都

朝起の古風を捨ぬ乙鳥かな
夕乙鳥我には翌^ア日^スのあてもなし
晝めしをたべにありたる雲雀哉
横乗の馬のつゞくや夕ひばり

野大根も花となりけり鳴雲雀
それ蛇に世話をやかすな明り窓
神風や蛇がをしへる山の道
小男鹿に手拭かさん角の跡
小男鹿の落した角を枕かな
角おちて恥しげなり山の鹿

奉納

おんひらく蝶も金比羅参りかな
蝶飛ぶや此世に望みないやうに

むつまじや生れ替らば野邊の蝶
大猫の尻尾でなぶる小蝶かな
蝶寐るや草ひきむしる尻の先
葎からあんな胡蝶の生れけり
田に畑にてんく舞の小蝶かな
門の蝶子が這へば飛びはへばとぶ
小男鹿や蝶をふるつてまた眠る
氣の毒やおれをしたふて来る小蝶

てふといふ娘山路の案内しけるに、俄雨はら

くといふりければ

木の陰やてふとやどるも他生の縁

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談
かげろふや白の中からま一筋
長閑さや垣間を覗く山の僧
陽炎や子をかくされし親の貌
長閑さや淺間けぶりの晝の月
陽炎や手に下駄はいて善光寺

風^{カゼ}あげてゆるりとしたる小村哉
美しき風あがりけり乞食小屋
我蒔た種をやれくけさの露
かまくらやむかしどなたの千代椿
菜の花や霞の裾に少しづゝ
陽炎やそばやが前の箸の山

小金原

呼あふて長閑に暮らす野馬哉
かるた程門の菜の花咲にけり

掃留——掃溜
の誤寫ならん

大菜小菜喰ふそばから花咲ぬ
春の日や暮ても見ゆる東山
三助がはつせ詣やはるの雨
傘さして箱根越すなり春の雨
朝市に大肌ぬぎや春の雨
掃留の赤元結やはるの雨
餅買に箱提灯や春の雨
春雨に大欠アッピする美人かな
袖だけの垣の嬉しやはるの雨

春雨や喰れ残りの鴨が啼

春甫新宅賀

安堵して鼠も寐るよはるの雨

婚禮

春雨や相に相生の松の聲
春雨や鼠のなめる角田川
穴藏の中でのいふ春の雨
負弓の藪にかゝりてはるの雨

鳩いけんして曰

梟よつらくせ直せはるの雨

水江春色

すつぽんも時や作らんはるの月
ついそこの二文渡しや春の月
待々し日永となれど田舎かな
春風やとある垣根の赤草履
宿引に女も出たりはるの風
老ぬれば日の永いにも涙かな
闇^{クラ}がりの牛を曳出す日永かな

春風や牛にひかれて善光寺
はるの風おまんが布の形りにふく
狗が鼠とるなりはるの風

不忍の池に龜どもの、菓子をねだるありさまを

見るに、此節娑婆に萬年の逗留もならん

永の日を喰ふや喰ずや池の龜
永日や牛の涎の一里ほど
おらが世やそこらの草も餅になる
我宿は何にもないぞ巢立鳥

好々や此年よりをよぶこどり
塊もこゝろおくかよ巢立鳥
手のひらにかざつて見るや市のひな

上巳之部

浦風にお色の黒いひいかな
煤けびなしかも上座をめされけり
花咲ぬかた山かげも雛まつり
盃よまつ流るゝな三日の月
筆添ておもふ盃流しけり

川下や果は鬨とりの小盃
人まねに鳩も雀も汐干かな

如病得醫

花を折^る拍子にとれししやくり哉
花のかげ南無さん火打なかりけり
かう活て居るもふしぎぞ花の陰

三月十七日保科詣

花ちるやとある木陰も小開帳
人撰して一人りなり花の陰

おとろへや花を折^ルにも口まげる

観音奉納

只たのめ花もはらくあ^ノ通り
山の月花盗人を照し給ふ
花のかげあかの他人はなかりけり
堪忍をいたしにゆくや花のかげ

刈萱堂

花の世は地藏ぼさつも親子かな
花の木のもつて生れた果報かな

大和めぐりする人に、旅の眞言といふを

さづけて

かならずよ迹見よそはか花の雲
今の世や猫も杓子も花見笠
有やうは我も花より團子かな
苦の娑婆や花が開けばひらく迎
さる人は病氣をつかふ花見かな

新吉原

行灯ではやしたてるや花の雲

御所にて

棟突が腮でをしへる櫻かな
櫻へと見えてじんぐばしより哉
一本は櫻もちけり娑婆の役
此やうな末世を櫻だらけかな
人聲にぼつとしたやら夕ざくら
氣に入た櫻のかげもなかりけり
花守や夜は汝が八重ざくら
袖だけの初花櫻咲にけり

山櫻皮を剝れて咲にけり
傘^{カラカサ}にべたりと付し櫻かな
天からでも降たるやうに櫻かな

けふは隣なる麻美と、前の日より約し置けるに
かれさはりありとて止ぬ。さはとて翌の命待も
のかはと、たゞひとり來りしに幸、懷に五元集
といふものゝあれば、これ究竟の夕相手なり。

櫻くゝと唄はれし老木かな
一夜さに櫻はさゝらばさらかな

下^{シモ}く^ニに生れて夜もさくらかな
小坊主や親の供して山ざくら

鞆 鞆 戲

ぶらんどや櫻の花を持ちながら

櫻草といふ題をとりて

我國は草も櫻を咲にけり
今すこしたしなくもがな堇草
百兩のいしにつりあふつゝじ哉
若艸や北野参りの子供講

はるの日の入所なり藤の花

東西の花に散たてられて、こゝろも山にうつり
ゆくといふ日は、三月廿日なりけり。

煤くさき笠も櫻の降日かな
君が代の大めし喰ふて櫻かな

根岸にて

山吹をさし出しさうな垣根かな
惣々にきげんとらるゝ蠶かな
そまつけに育られたる蠶かな

そまつけに
「さまつけ」
にの誤ならん

やよしらみ這へく春の行方へ
茶もつみぬ松も作りぬ丘の家
舞くや翌日なきはるを笑ひ顔
ゆさくと春が行ぞよ野邊の草
陽炎の内からもたつ淺生かな

地獄

夕月や鍋の中にて啼田にし

饑鬼

花散るや吞たき水を遠霞

畜生

散花に佛とも法ともしらぬかな

修羅

聲くに花の木陰のばくちかな

人間

咲花の中にうごめく衆生かな

天上

霞日やさぞ天人の御退屈

夏の部

下谷一番の顔してころもがへ
おもしろい夜は昔なり更衣
年とへば片手出す子や更衣
けふの日や替てもやはり苔衣
立ながら綿ふみぬいで出たりけり

文虎が妻身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初裕

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんのはつ裕
春日野の鹿に嗅るゝ裕かな
南無あみだどてらの綿よひまやるぞ
人らしく替もかへたり苔衣

草庵

其門に天窓用心ころもがへ
ふだらくや赤い裕の小順禮

大山詣

さん出す—
「つん出す」の
誤ならん

四五間の木太刀をかつぐ裕かな
鶯のほゝと覗くや花御堂
永日^{ナガヒ}にかわく間もなし誕生佛
雀子もおなじく浴る甘茶かな
馬の子が口さん出すや杜若
扇にて尺をとらせる牡丹かな
葉隠れの赤い李^{スモ}になく小犬
大江戸やおめずおくせず杜若
朝がほにはげまされたる夏書かな

澁柿のしぶく花になりにつけり
隠家や死^シばすだれの青いうち
夕かげや駕の小脇の夏花持
是ほどのぼたんと仕かたする子かな
てもさても福相のぼたんかな
通路に階子わたすや杜若

二十四年榮花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花
桑の木は坊主にされてけしの花

けしきさげて群集の中を通り鳥
卯の花の垣に名代のわらぢかな
卯の花や白の目切と鶯と
我上へ今に咲らんこけの花
かわくまで縄張庭や若葉吹
若葉してまたもにくまれ榎かな
門番のほまちのけしの咲にけり
卯の花の吉日もちし後架かな
菴の苔花さくすべもしらぬ也

禪 寺

すみぐも掃除とゞくや木下闇
法談の手まねも見えて夏木立
大寺は留守の體なり夏木立
筍タケの子に病のなきはなかりけり
首だけの水にもそよぐほ麥かな
せい出してそよげ若竹今の内
若竹と呼るゝうちもすこしかな
あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに

まくら—本
文「まくら」
に誤る

鮓になる間と配るまくらかな

老翁岩にこしかけて、一軸をさづくる圖に

我汝を待事ひさし時鳥
是でこそ御時鳥まつに月
這渡るはしの下よりほとゝぎす
時鳥俗な菴とさみするな
ほとゝぎすなくや頭痛のぬけるほど
此雨にのつびきならじ時鳥
せはしさを我にうつすな子規

鎮西八郎爲朝、人礫うつ所に

時鳥蠅むしめらもよつく聞け

卯の花もちそうにさくか蜀魂ホト、ギス

先住のつけわたりなり閑古鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとか閑古鳥
前の世のおれがいとこか閑古鳥

雲をはく口つきしたり墓
目出たさは今年の蚊にも喰れたり
蚊の聲になれてすや／＼寐る子哉
宵越の豆腐明りに藪蚊かな
蚊柱の外にのうなき榎かな
蚊いぶしもなぐさみになる獨かな
我宿の後れ松魚も月夜かな
神國は天から薬ふりにけり
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ

我宿は口で吹ても出る蚊かな
隙人や蚊が出た／＼とふれ歩行
晝の蚊やだまりこくつて後ろから
蚊柱の穴から見ゆる都かな
年寄と見てや鳴蚊も耳のそば
芝浦やはつ鱉から夜のあける
鹿の親笹吹風に戻りけり
五月雨の竹にはさまる在所かな
晝の蚊を後^{ワシロ}にかくす佛かな

鶯よ老をうつるな艸の家
蜘蛛の子はみなちりぐの身すぎ哉
かはほりやさらば汝と兩國へ
まつて居る妻子もないか通し鴨
烟して蝙蝠の世もよかりけり
あやめめせ武門かやうに静なり
古婆々がかたにかけゝり蛇の衣
羽蟻出る迄に目出たき柱かな
はげ天窓簾ミカをかけると行々子

罷り出たるは此藪の墓ヒキにて候
年寄の袖としらでやとらが雨
とらが雨などかろんじてぬれにけり

妙義山

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

粒々皆辛苦

もたいなや晝寐してきく田植唄
信濃路や上の上にも田うゑ唄

身一ツすごすとて、女やもめの哀は

おのが里仕舞てどこへ田うゑ笠

住よし

唐人も見よや田植の笛太鼓
早乙女^{サトメ}や箸にからまる草の花
稽古笛田はことくく青みけり
寐せつけし子のせんたくや夜の月
夏山やひとりきげんの女郎花
なぐさみにはらを打なり夜の月
小むしろや茶釜の中の夏の月

はら—わら
(藁)の誤也

茨の花こゝをまたげと咲にけり
短夜に竹の風くせ直りけり
起く^くに慾目引ばる青田かな
豆腐やが来る晝顔が咲にけり
夏の夜や二軒して見る草の花

源氏の題にて

夕がほや男結^ヒの垣にさく

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり虫よ翌日も又

ひいき鶺鴒は又もからみて浮みけり
手枕や親子三人鶺鴒のかせぎ
はなれうが子の泣舟に戻りけり
賑しう鐘の鳴込鶺鴒舟かな
鶺鴒のまねをうより功者な子供かな
初螢ついとそれたる手風かな
最うひとつ川を越とよ飛螢
ゆけ螢とくく人の呼うちに
大螢ゆらりくを通りけり

不忍池

螢火や呼らぬ龜は膳先へ
されわらぢ螢とならば墨田川
夕月や大はだぬいでかたつぶり
我袖を親とたのむか逃ほたる

里俗かたつむりをでいるといふ

此雨の降にどつちへでいろかな
朝やけがよろこばしいか蝸牛
柴の戸や錠の替りにかたつぶり

かたつぶりそろ／＼登れ不二の山
なか／＼に安堵がほなり羽抜鳥
六月や月夜見かけて煤拂

小金原

母馬が番して吞す清水かな
山里は馬にかけるも清水かな
人來たら蛙になれよ冷し瓜
初瓜を引とらまいて寐た子かな
三日月とひとつ並ナラビや冷し瓜

あさら井や小魚と遊ぶ心太
旅人や山にこしかけて心太

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏ざしき
旅やせをめでたがるなり夏座敷
まつかけや扇でまねく千兩雨
手にとれば歩行たくなる扇かな
西山や扇落しに行ッ月夜
夕暮の腮につゝはる扇かな

乙松や今年まつりの赤扇
小座頭の天窓へかぶる扇かな
他の人の見るも恥し夏ざしき

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ、三界無安と

いふ事を

蠅よけの草を釣して扱どこへ
蟬鳴や我家も石になるやうに
蟬鳴や天にひつつく筑摩川
ねがはくば念佛をなけ夏の蟬

豊年の聲をあげけり門の蠅
蠅一ツうてば南無あみだ佛かな
世がよくばもひとつとまれ飯の蠅
侍に蠅を追せる御馬かな
やれうつな蠅が手をする足をする
まゝつ子や晝寐しごとに蚤拾ふ
蚤の跡かぞへながらに添乳かな
蚤焼て日和占ふ山家かな
草の葉や世の中よしと蠅さわぐ

山蟬のたもとの下を通りけり
松の蟬どこ迄鳴てひるになる

新家賀

涼しさや糊のかわかぬ小行燈

春甫、京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

兩國橋上

下見でもほう圖がないぞ涼舟
涼しさや笠を帆にして煮賣舟

四條河原

涼風に月をも添て二文かな
涼しさや彌陀成佛の此かたは
草雫今こしらへし涼風ぞ
藪村の貧乏なれて夕涼
魚どもが桶ともしらで夕涼み
此月に涼みてのない夜なりけり

人形町

人形に茶をはこばせて涼み哉

門涼人の朝がほ咲にけり

銚子にて

朝涼や汁の實を釣ル背戸の海

きのふは鮮魚に宴して、けふは松宇佛

夜涼が笑ひ納めでありしよな
涼風やちから一ぱいきりくす
すゝ風も隣の竹のあまりかな
拵た露も涼しや門の月

江戸住人

錢なしは青草も見ず門すゝみ

おく信濃に浴して

下々も下々下々の下國の涼しさよ
身の上のかねとしりつゝ夕涼み

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて來りけり
丘の家や蓮に吹れて夕茶漬
萍ワキクサの花よこいゝ爺が茶や
むだ花にけしきとられて青瓢

團扇はつて先^{マッ}そよがする萍かな

臼井峠にて

信濃路の山が荷になる暑かな
落の葉にほんと穴あく暑かな

關宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寐たり鳥
米直段ぐつくとさがる暑かな
兎角してはした夕立ばかり也
あとからもまたござるぞよ小夕立

夕立や行燈直す小椽先

蟻の道雲の峰よりつゞきけり
湖水から出現したり雲の峰
投出した足の先なり雲の峯
川狩のうしろ明りやむら木立
川がりや地藏のひざの小わき差

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ
麻の葉に借錢書て流しけり

形代をとく吹ふるせ萩すゝき
形代にさらばくをする子かな
灯笼のやうな花咲く御祓かな

俳諧
一茶發句集
下

一茶發句集下

秋の部

秋立や隅の小隅の小松島

狗子有佛性

秋來ぬとしらぬ狗が佛かな
星さまのさゝやき給ふけしき哉

梶の花に――
「梶の葉に」の
誤ならん

輝に笛つきさして星むかひ
聳星にいで披露せん稻の花
哥書や梶のかはりに糸瓜の葉
姫星の御顔をかくす榎かな
七日の夜只の星さへ見られけり
星待や龜も涼しいうしろつき
子寶が蚓蚓のたるぞ梶の花に

病 中

うつくしや障子の穴の天の川

木曾山へ流れ込けり天の川

草鞋ながら墓参りして

息才で御目にかゝるぞ草の露
あの月は太郎がのだぞ迎鐘
未の子や御墓参りの箒持
迎火は草のはづれのくかな

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたたく
鼠尾草や水につければ風が吹

玉棚や上座して鳴きりくす

魂送

おれが場もとく頼むぞよ佛達
精霊の立ふる舞の月夜かな
山里やあゝのかうのと日延盆
べつたりと人のなる木や宮角力
草花を腮でなぶるや勝角力
板行にして賣れけり負相撲
椽はなや二文花火も夜の體

稻妻やうつかりひよんとした貌へ
たのもしやまだ薄暑き三日の月
門の月暑がへれば人もへる

神前

秋風や艸も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

病後

かな釘のやうな手足を秋の風

秋風に歩行て逝るほたるかな

さと女三十五日

秋風やむしり残りの赤い花
秋かぜの吹けとは植ぬ小松かな
秋風や壁のへまムシヨ入道
墨染の蝶が飛なり秋の風

正見寺上人十ばかりなる後住を残して、迂化あ

りし哀さに

秋風やちひさき聲のあなかしこ

寐薙や野分を吹かす足のうら

五十過ては

露はらりく大事の浮世かな
露置くや茶腹で越えるうつ山
露ちるや地獄の種をけふも蒔く
しら露に浄土参りのけいこかな
火ともして生おもしろや艸の露

男女私にちぎりて、夜ひそかに遊行を教訓して

人間は露と答へよ合點か

愛子を失ひて

露の世は露の世ながら去ながら
露ちるやむさい此世に用なしと
秋霧や河原撫子見ゆるまで
霧に眠る目付きして居^ル墓^{ヒイキ}かな
あり明や浅間の霧が膳を這ふ
寐がへりをするぞ脇よれきりぐす
白露の玉ふんかくなきりぐす
彌陀堂の土になる氣かきりぐす

若いぞく
「若いぞく」
の誤り

藪むらや灯ろの中にきりぐす
きりぐす聲が若いぞくくに

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛かな
放^ヘ屁^{フリ}虫^{ムシ}爺^{ジヤ}が垣根としられけり
寒いぞよ軒の蜩が唐がらし
其分にならぬくと螳螂哉
古犬や蚯蚓の唄にかんじ貌
御祭りに赤い出^デ立^{ダチ}のとんぼかな

二百十日

世の中はよすぎにけらし草の露
狩好きの其身にかゝる夜露哉
御目出度存候今朝の露

うどん花

甘い露ばせをさく迎降りしよな
夕やけやから紅クレナキに露しぐれ
朝顔や人の貌にはそつがある
薺や一霜添てはつと咲

朝貌の上からとるや經山寺
女郎花あつけらこんと立りけり
鬼灯を膝の小猫にとられけり

萩 寺

存の外俗な茶屋あり萩の寺
耳に珠數掛けて折なり草の花
何事のかぶりぐぞをみなへし
女郎花一夜の風に衰ふる
入相の聞處なり草の花

散芒寒くなるのが目にみゆる
穂芒やおれが小鬢もともそよぎ
きりくしやんとして咲^ク桔梗かな
うかくと出水に逢ひし木^ム槿^シかな
むだ花に氣色とられし瓢かな
萩の末芒のもとや喰祭
江戸川や月待^ツ宵の芒ぶね
名月やまづはあなたも御安全
明月の御覽の通り屑家かな

病 中

名月やとばかり立居むづかしき
明月のさつさと急ぎ給ふかな
明月を取てくれろと泣子かな
名月やあてにもせざる壁の穴

姨 捨 山

けふといふけふ名月の御側^{オソバ}かな

赤 馬 關

名月や蟹も平をなのり出

筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山

やかましかりし老妻ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月

姥捨などは老足むづかしく

有合の山ですますやけふの月

月 蝕

人貌は月より先へ缺にけり
むだ草も穂にほが咲て三日の月

深川や蠣殻山の秋の月

春耕孫祝

門の月殊に男松のいさみ聲
翌の夜の月を請合ふ爺かな
月も月そもく大の月夜かな
明く口へがさすなり隅田川
赤い月是は誰がのじや子供達
秋の原知たらなんぞ唄ふべき
秋日和とも思はない凡夫かな

なぐさみのはつちくや秋日和

母のなき子の這習ふに

をさな子や笑ふにつけて秋の暮
立な雁住ばどつこも秋の暮

病 後

ゑいやつと活^{イキ}た所があきの暮
蘆の穂を蟹がはさんで秋の暮
中く^くに人と生れてあきの暮

八月二十九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ、八月廿八日詣
るとしてありけるに、今は三十年餘りの昔
ならん。おのれ彼地にとまりて、一ツ鍋のも
の喰ひて笑ひのゝしり、むつまじき人達なり。
あはれきのふ参りたらんには面會して、こしか
た語りて心なぐさまんものを、互ひに四百餘里
の道程へだよりぬれば、ふたゝび此世には逢が
たき齡にしあれば、しきりにしたはしくなつか
しくなむ。